

大学生におけるインターネット利用と親子関係との関連

The association between internet using and relationships with parents among university students

長 内 明日香

はじめに

現代社会では、インターネットが大人、子どもを問わず人々の日常生活に欠かせないツールとなってきている。その一方で、近年、子どもたちの不適切なインターネット利用実態や、いわゆるインターネット依存（以下、ネット依存とする）を問題視する指摘が増えてきている（藤川, 2008; 鶴田・田中, 2012）。「平成28年度通信利用動向調査」（総務省, 2017）によると、日本におけるインターネットの普及率は83.5%となり、増加傾向にある。大学生は、携帯電話について、通話よりもメール機能を利用する頻度が高くなっていることが指摘されており（服部ら, 2003）、近年はLINEなどSNS機能の利用頻度も非常に高い。さらに、日本では「インターネット依存者」よりも、ネット依存予備群である「インターネット依存傾向者」が多い（安藤, 1999）という指摘もある。

Young (1998) はネット依存を「寝食を忘れてインターネットにのめりこんだり、インターネット利用を止められないと感じたりする、インターネットに精神的に依存した状態」と定義している。また、鄭 (2008) によると、ネット依存傾向とは、「インターネットに没入してしまうあまり、コンピュータや携帯電話が使用できないと何らかの情緒的苛立ちを感じる、また実生活における人間関係を煩わしく感じ、通常の対人関係や日常生活の

心身状態に弊害が生じるにも関わらず、インターネットに精神的に依存してしまう状態」と定義されている。ネット依存の定義はいくつか存在するが、鄭 (2008) による定義はYoung (1998) の定義を踏襲した上でネット依存を「インターネット依存傾向」として捉えており、日本のインターネット情勢を考慮している。よって、本研究では鄭 (2008) によるネット依存傾向の定義を用いて研究を進める。

また、ネット依存の測定としてYoung (1998) が作成した診断基準Internet Addiction Test (IAT) がある。IATはアメリカ精神医学会によるDSM-IVの病的賭博や薬物依存の診断基準をインターネットにあてはめて作成したものであり、ネット依存の診断基準としてよく用いられる。例えば、佐藤ら (2014) によると中学生では8.7%、高校生では19.5%、大学生では36.6%が中等度以上のネット依存を示していたことが報告されている。しかし、松原 (2015) では、Young (1998) による測定尺度は病的賭博や薬物依存から翻案されたものが多く、日本の文化的背景やインターネット情勢がIATと一致しない部分があると述べられている。このような状況もあり、日本では、鄭 (2007) による大学生のインターネット依存傾向尺度や、鶴田 (2014) による高校生向けのインターネット依存傾向尺度が多く用いられている。

ネット依存に関する研究として、青山・高

橋 (2015) は、大学生におけるネット依存傾向とネット上での攻撃行動について仮想的有能感の視点から関連を検討している。この研究から、仮想的有能感の高い人は良好的な対人関係を築きにくいと、孤独を感じネット依存に陥りやすくなるということが明らかにされている。鄭 (2013) は、ネット依存傾向の形成要因として「物理環境」「個人性格」「心理情緒的」「心理ストレス」「対人関係」「家族会話機能」の6要因のモデルを提示している。また、「インターネット依存傾向者」としては、発達的に心理社会的にモラトリアムであり、最もインターネットと付き合える環境にありつつ、青年期危機を伴う動揺を感じやすい時期にいる大学生に相当いると考えられている (鄭, 2008)。

親子関係に関する研究としては、山岸 (2000) は、青年期は心理的離乳の時期であり、親子関係が大きく変化する時期と述べている。また、青年期の中でも大学生に焦点を当てると、この時期は親との心理的距離を最も大きくとると同時に親を客観視できるようになり、対等な親子関係を築くようになることが示される (落合・佐藤, 1996)。これらの知見から、親子関係の捉え直しが可能な時期に適切な親子関係を再構築することが重要になると考えられる。

ネット依存の問題や親子関係に関わる研究はこれまで多く行われてきているが、ネット依存と親子関係との関連については先行研究が数少ない。松原 (2015) ではネット依存傾向と親子関係の在り方に関連を示し、親子関係が良好であり支配的な状態がインターネット依存に陥りやすい傾向にあると述べられている。堀川 (2015) では、親子関係の葛藤が抑うつや孤独感の背景要因であるとともに依存者特有のネット利用 (動画や画像ダウンロード) につながっていることが示されている。日本においてネット依存と親子関係との関連の先行研究は上記のみである。また、イ

ンターネット利用 (以下、ネット利用とする) による親子関係についての研究の中で親子関係の変化に焦点を当てたものは見当たらない。ネット依存と親子関係との関連に影響する要因を検討しネット利用によって生じる親子関係の変化について検討することは、ネットを介して親子関係にトラブルが生じるのを防ぐことにつながる。それだけではなく、親子関係に問題を抱えた家庭への援助や介入方法を検討することにも益すると思われる。

以上より、本研究ではネット利用による親子関係の変化が現在の親子関係やネット依存傾向にどのような関連を持つのかを検討することを目的とする。

<予備調査>

目的

大学生にネット利用と親子関係の変化に関する質問紙調査を実施することにより、ネット利用の現状や親子関係について考え、本調査の仮説生成と本調査で使用する尺度作成を行う。

対象と方法

1. 調査時期および対象者

2017年7月上旬に、道内の国公立大学の大学生103名に対して質問紙調査を実施した。

2. 質問紙構成

まず、インターネットの利用開始時期をパソコン、スマートフォン、タブレットの3種類のメディアに項目を分けて「小学1年生～3年生・小学4年生～6年生・中学生・高校生・大学生・利用していない」いずれか1つに回答するよう求めた。ネット利用にはオンライン・ゲームも関わるが、今回はゲームの利用をパソコンとスマートフォンに含まれる

と考え、ゲーム機は項目に加えなかった。

また、インターネットを利用してから親との関係に変化が生じたのかをメディアごとに「良くなった」「悪くなった」「変わらない」の3件法で尋ねた。さらに、ネットを利用することで親との関係が「良くなった」と感じる点と「悪くなった」と感じる点の具体的な変化について、それぞれ自由記述を求めた。

結果

1. インターネットの利用開始時期

ネット利用の現状として、パソコンは小学1～3年生で19%、小学4～6年生で38%、中学生で35%であった(図1)。スマートフォンは中学生で11%、高校生で65%、大学生で28%であり、高校生の利用開始時期が過半数を超えた(図2)。タブレットは「利用していない」が71%であった。

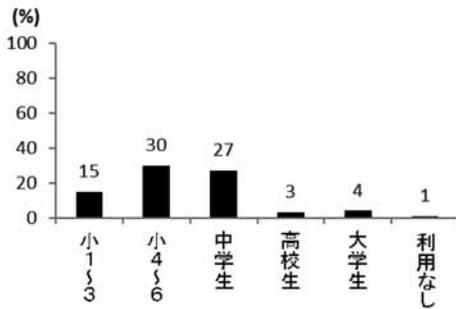


図1 パソコンの利用開始時期

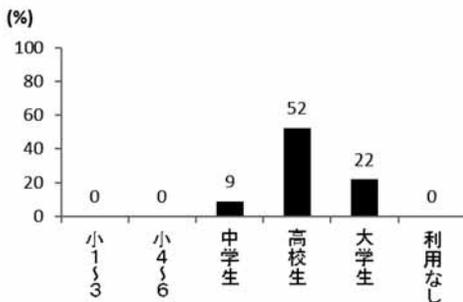


図2 スマートフォンの利用開始時期

2. ネット利用による親子関係の変化

まず、インターネットを利用してから親との関係に変化が生じたのかをメディアごとに「良くなった」「悪くなった」「変わらない」の3件法で尋ねた項目について、スマートフォンにおいては72%が「変わらない」、その他の機器においては9割以上が「変わらない」という回答であった。しかし、「変わらない」と回答したのにも関わらず、親との関係が良くなったあるいは悪くなったと感じる点について記述をしている人が多かった。そこで、85名の記述内容に対してKJ法を参考にした分析を行った結果、16のグループに分けられた。さらに、再度分析を行った結果、「親との交流増加」「親との連絡のとりやすさ」

表1 ネット利用による親子関係の変化に関する記述

ポジティブな変化
①親との交流増加
親と会話しやすくなった
親に自分の気持ちを伝えやすくなった
親に機器の使い方を教えるようになった
親と一緒にゲームをするようになった
②親との連絡のとりやすさ
親と情報を共有しやすくなった
離れている親と連絡をとりやすくなった
親に帰宅時間を連絡しやすくなった
親に頼みごとをしやすくなった
ネガティブな変化
③親との交流減少
親に言えないことがふえた
親に物事をきく機会が減った
親と一緒にいる時でも会話することが減った
親と同じ時間を共有することが減った
自分の部屋にこもることが増えた
④親から干渉を受ける
親からネットの利用時間について忠告を受けるようになった
親とネットに関わる料金のことでもめるようになった
何かにつけて親から聞かれるようになった
親に干渉されていると感じるようになった

というポジティブな変化が起こるといった内容のグループが2つと、「親との交流減少」「親から干渉を受ける」といったネガティブな変化が起こるといった内容のグループが2つ、計4つのグループに分けられた(表1)。これを参考にして16項目の質問項目を独自に作成し、ネット利用による親子関係の変化尺度として本調査で用いることにした。

考察

1. インターネット利用開始時期についての検討

インターネットの利用開始時期に関して、現在のネット利用時のメディアとしてはパソコンやスマートフォンが主であることが窺える。パソコンは幼い頃から利用している人が2割ほどいる一方で、大学生になっても利用していない人が見られた。しかし、スマートフォンについては、高校生から利用を始める人が多く、大学生になると今回の対象者全員が所持しているという結果になった。

パソコンは個人所有のものだけでなく、家庭に1台置いてあるものを利用していただけの可能性があるので、他のメディアに比べて早い時期から利用している人が多かったことが窺える。スマートフォンについては、対象者が高校生の頃にスマートフォンが急速に普及し始めたことにより、利用を始めた人が多くなったことが考えられる。あるいは、親が子どもに連絡手段としてスマートフォンを持たせていたのが、そのままネット利用に繋がったという可能性があるかもしれない。田中(2009)では、パソコンや携帯電話を持つ高校生の多くが、携帯依存(携帯を使用することに依存してしまうこと)によって「ネットに使われる」状態に陥ってしまい、それによってネット依存の状態にあることを指摘している。このことから、現代社会においても子どもがネット依存に陥る危険性が示唆される。

2. ネット利用による親子関係の変化についての検討

ネット利用による親子関係の変化については、多くの大学生が「変わらない」と回答していたのにも関わらず、親との関係が変化したと感じる点について記述のある人が多かった。記述には、「親と一緒にゲームするようになった」「親に機器の使い方を教えるようになった」など親とネットを通してコミュニケーションが増加したという内容や、「親と情報を共有しやすくなった」「以前より親と連絡をとるようになった」など親と連絡をとる機会が増加したという内容が見られた。また、「親と話す時間が減った」「自分の部屋にこもることが多くなった」など親と直接関わる機会が減少したという内容や、「ネットの使い方について親から注意を受けた」「親に監視されている気がする」など親から干渉を受けたという内容も見られた。

多くの大学生が、「良くなった」「悪くなった」「変わらない」の選択肢の中で「変わらない」と回答していたのにも関わらず、親との関係が変化したと感じる点についての記述が多かったのは、子ども側はインターネットを利用しても親子関係が「良くなった」あるいは「悪くなった」という顕著な変化が起こったとは判断していないが、ネットを通して親と関わりが増えたということ、あるいは親との間のコミュニケーションが希薄になり、親の話に集中できなくなったなどの変化を体験していることが窺える。それだけではなく、予備調査より得られた記述内容は、ネット依存と親子関係との関連に影響する要因となり得ることが示唆される。

＜本調査＞

目的

松原（2015）の調査を参考に、大学生に質問紙調査を実施することにより、①子どものネット利用による親子関係の変化について検討する②ネット依存傾向と親子関係の関連を検討する③ネット依存傾向と親子関係との関連に影響する要因を検討する。

本研究の仮説は、予備調査を踏まえて①子どものネット利用による親子関係の変化にはポジティブな側面とネガティブな側面が見られる②ネット依存傾向と親子関係には関連があり、親子関係が良好ではないほどネット依存傾向と強い結びつきを持つ③ネット利用による親子関係の変化が、ネット依存傾向と現在の親子関係に影響を及ぼす要因の一つとなる、とする。

対象と方法

1. 調査時期および対象者

2017年11月～12月下旬にかけて、道内の国公立大学の大学生159名（女性87名、男性72名、平均年齢20.49歳、標準偏差1.16）に対して質問紙調査を実施した。

2. 質問紙構成

1) フェイスシート

調査の概要と調査協力の依頼、倫理的配慮についての説明を記載した。倫理的配慮の具体的な内容は、調査への協力は決して強制されるものではないこと、回答結果は統計的に処理され個人が特定されないこと、調査者の管理の下、本論文の作成にのみ使用されることで構成されている。また、性別、年齢、現在のネット利用時間やネット利用開始時期など計8項目を尋ねた。

2) ネット利用による親子関係の変化尺度

ネット利用による親子関係の変化尺度は、インターネットを利用したことにより、利用する前と比較して変化する親子関係の在り方について調査するために、予備調査において独自に作成した16項目を使用した。回答は7件法を用いており、「全くあてはまらない」を1点、「ほとんどあてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまる」を5点、「かなりあてはまる」を6点、「非常にあてはまる」を7点とし、得点化した。

3) 親子関係尺度

親子関係尺度は、現在の親子関係の在り方について調査するために使用した。松原（2015）では、落合・佐藤（2006）の親子関係尺度（86項目）に記述されている主語（母親・父親）を全て「親」にし、各因子（「子が親から信頼・承認されている親子関係」「親が子を危険から守る親子関係」「親が子と手を切る親子関係」「親が子を頼りにする親子関係」「子が困った時には親が支援する親子関係」「親が子を抱え込む親子関係」の全6因子）の中から因子負荷量の高い5項目（合計30項目）を選択し、作成したものを使用していた。また、松原（2015）では、親子関係尺度の30項目のうち因子負荷量がそれほど高くないものを除外し26項目を使用していたが、本研究ではその26項目から因子負荷量がそれほど高くないものを除外し（因子負荷量.60以下を除外）、計20項目を親子関係尺度として用いた。回答は、今後の研究においてデータの再現性を高めるために7件法を用いている。

4) 日本版インターネット依存傾向測定尺度

日本版インターネット依存傾向尺度は、インターネット依存傾向を調査するために使用した。これは、和田（2002）や長田・上野（2005）による先行研究を参考に、鄭（2007）が日本の大学生を対象として作成した尺度である。鄭（2007）の先行研究によると、「禁断症状」

「現実との区別支障」「日常生活・身体的影響」「肯定的メリット」「快的満足感」「仮想敵対人関係」「没入」の7因子49項目かから構成されている。回答は5件法を用いており、「全くあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「あてはまる」を4点、「非常にあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「あてはまる」を4点、「非常にあてはまる」を5点とし、得点化している。本研究では、データのばらつきを考慮し、同様の尺度を用いて7件法で回答を求めた。

結果

1. ネット利用による親子関係の変化尺度の検討

まず、ネット利用による親子関係の変化尺度16項目の平均値、標準偏差を算出したところ、フロア効果を2項目確認した。しかし、尺度は本研究で独自に作成したものであり、項目数が少ないためこれらを除外せず分析を行った。内的整合性を確認するために、信頼

性係数（クロンバックの α 係数）を算出すると $\alpha = .784$ と高い数値を示したため、一貫性が確認された。

次に、因子構造を探るために16項目に対して主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子合計4因子解、16項目が抽出された。第1因子に高い負荷を示した項目は「親と同じ時間を共有することが減った」「親と一緒にいる時でも会話をすることが減った」であった。このことから、ネットを利用する時間が増えたことによって子どもが親と直接的に交流する時間が減少していることを表す因子と解釈し、〈親との対面交流減少〉の因子と命名した。第2因子に高い負荷を示した項目は「親と会話しやすくなった」「親に自分の気持ちを伝えやすくなった」であった。以上のことから、ネットを介して子どもが親と交流する時間が増加していることを表す因子と解釈し、〈ネットを通した親との交流増加〉の因子と命名した。第3因子に高い負荷を示した項目は「親に頼みごとをしやすくなった」「親と情報を共有しやすくなった」「親に帰宅時間を連絡しやすくなった」などであった。このことから、ネッ

表2 因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）

質問項目	1	2	3	4
第1因子：親との対面交流減少				
親と同じ時間を共有することが減った	.730	.130	-.006	.032
親と一緒にいる時でも会話が減った	.687	.224	-.097	.172
親に物事を聞く機会が減った	.633	.186	.109	.133
親に言えないことが増えた	.527	.074	.031	.216
自分の部屋にこもることが増えた	.498	-.028	-.017	.181
第2因子：ネットを通した親との交流増加				
親と会話しやすくなった	.250	.665	.299	-.043
親に自分の気持ちを伝えやすくなった	.371	.613	.248	-.048
親と一緒にゲームするようになった	.057	.468	.139	.126
親とネットに関わる料金のことでもめるようになった	.156	.433	-.049	.368
第3因子：親との連絡のとりやすさ				
親に頼みごとをしやすくなった	.073	.239	.655	.050
親と情報を共有しやすくなった	-.109	.351	.571	.022
親に機器の使い方を教えるようになった	-.043	.104	.462	.163
親に帰宅時間を連絡しやすくなった	.129	-.112	.425	-.102
離れている親と連絡をとりやすくなった	-.062	.240	.344	.056
第4因子：親からの干渉				
親に干渉されていると感じるようになった	.341	.136	.059	.677
親からネットの利用時間について忠告を受けるようになった	.335	-.002	.136	.606
寄与率 (%)	22.55	33.556	38.216	41.731

トを利用する際に機能的な面で親と連絡をとりやすくなったことを表す因子と解釈し、〈親との連絡のとりやすさ〉の因子と命名した。第4因子に高い負荷を示した項目は「親に干渉されていると感じるようになった」「親からネットの利用時間について忠告を受けるようになった」の2項目であった。このことから、ネット利用に関して親から時間や料金の制約を受けるなどの干渉を受けることを表す因子と解釈し、〈親からの干渉〉の因子と命名した。

2. 日本版インターネット依存傾向測定尺度の再検討

まず、日本版インターネット依存傾向尺度49項目の平均値、標準偏差を算出したところ、天井効果およびフロア効果を18項目確認した。しかし、今回は鄭（2008）を参考にしてこれらを除外せずに因子分析を行った。内的整合性を確認するために、信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出すると $\alpha = .952$ と高い数値を示したため、一貫性が確認された。

因子構造を探るために49項目に対して主因子法による因子分析を行った。スクリープロットによる落ち込みを参照した結果、5因子構造が妥当であると考えられた。しかし、第1因子に高い因子負荷量を示す項目（負荷量が.45以上）が49項目中36項目あったため、低い負荷量を示す項目を除外し、36項目に対して主成分因子分析を行った（表3）。その結果、1項目を除き、35項目が第1因子で高い因子負荷量を示した。以上より、主成分分析によって得られた35項目の得点を合計し、インターネット依存傾向得点とした。

次に、ネット依存傾向の下位尺度と親子関係など各尺度との関連も検討するため、因子数を5因子に固定した上で、再度49項目に対して主因子法による因子分析を行った。その中から松原（2015）で負荷量が.350に満たな

表3 主成分因子分析結果

質問項目	成分
	1
4. ネット使用のためお金をたくさん使う	.573
5. ネットをしていると異空間に入れる感じがして自分がいつもの自分と少し違う	.682
6. ネットをするとストレスが全部解消されたように思う	.583
8. 常にネット上のことが心配で気になる	.695
9. ネット使用で生活が不規則になった	.438
10. 実生活で出会う人よりネット上で出会う人のほうがよりよく理解できる	.677
13. ネットして非道徳的なことをすることがある	.659
14. する時間を短くしようとして試してみても失敗したことがある	.458
15. ネットのせいで疲れて授業中に居眠りする	.574
16. 現実の人よりネットで知り合った人が、私によくしてくれる	.699
18. ネットをやっていることを実生活でやってみたい	.635
19. ネット上のことで不安がある	.688
20. ネットを深夜までしてしまい、睡眠不足になった	.479
22. 使用が原因で実生活上問題が発生しても使用をやめられない	.668
23. ネットに接続できないと欲求不満になる	.589
24. ネットをやっていないときもネットの音が聞こえたり、ネットしている夢を見る	.694
25. ネットができなくなるとどこでもいいから一刻も早く使える環境に行きたい	.678
26. ある程度のネットの接続時間がないと満足できない	.531
29. オフライン状態よりオンライン状態のほうが私を理解してくれる人が多い	.650
30. ネットのできないときや使用後は時々むなしくなる	.736
31. する時間が長いと周囲の人から文句を言われることがある	.554
32. ネットの接続を切断するときに憂うつな気持ちになる	.763
33. ネットすることで家族とトラブルがある	.651
34. ネット荒らしに遭って嫌な思いをした	.691
35. ネットをするため遅刻したり、授業を休んだりした	.687
36. ネットを途中で終わるとまたやりたくなる	.551
37. ネットが友達より重要な存在である	.734
38. ネットができないと他のことに集中できない	.803
39. ネットをやっていないときもやっているような幻覚を覚えたことがある	.696
40. ネットするとき心が一番ほっとする	.805
43. 二度とできないと思うととても耐えられない	.484
44. ネットしないとイライラして気持ちが落ち着かない	.737
45. ネットをした後はぼんやりして危ない感じがした	.581
47. 計画していたことをやらなかったことがある	.469
48. ネットに熱中し成績が落ちた	.682
49. ネットをしている間はとても自由だと思う	.361

寄与率 (%) 40.626

表4 因子分析結果 (主因子法、バリマックス回転)

質問項目	1	2	3	4	5
第1因子：ネットへの囚われ					
ネットが友達より重要な存在である	.825	.194	-.018	.045	-.076
ネットをやっていないときもやっているような幻覚を覚えたことがある	.810	.149	.023	-.098	-.103
現実の人よりネットで知り合った人が、私によくしてくれる	.757	-.072	.145	.215	.151
ネットするとき心が一番ほっとする	.754	.316	.131	.138	-.130
ネットをやっていないときもネットの音が聞こえたり、ネットしている夢を見る	.735	.192	.016	.035	.023
実生活で出会う人よりネット上で出会う人のほうがよりよく理解できる	.724	-.021	.092	.264	.116
ネットをするため遅刻したり、授業を休んだりした	.663	.209	.158	-.075	.033
ネットができないと他のことに集中できない	.658	.418	.264	.058	-.166
ネットして非道徳的なことをすることがある	.652	.144	.109	.044	.142
オフライン状態よりオンライン状態のほうが私を理解してくれる人が多い	.616	.049	.194	.142	.211
ネットの接続を切断するときに憂うつな気持ちになる	.595	.359	.361	-.097	.063
ネット上のことで不安がある	.583	.068	.326	.189	.099
ネット使用のためお金をたくさん使う	.579	.122	.051	.129	.088
ネットをした後はぼんやりして危ない感じがした	.564	-.083	.380	.078	-.151
常にネット上のことが心配で気になる	.555	.216	.250	.229	.137
ネットしないとイライラして気持ちが落ち着かない	.554	.428	.250	.212	-.151
ネットのできないときや使用後は時々むなしくなる	.483	.396	.382	.113	.082
ネットではすぐ必要な情報が得られるので便利だ	-.372	.092	.133	.198	.343
第2因子：ネット欲求					
ネットに接続できないと欲求不満になる	.278	.666	.055	.318	.191
二度とできないと思うととても耐えられない	.161	.648	.174	.149	.075
ある程度のネットの接続時間がないと満足できない	.173	.648	.202	.271	.089
使用が原因で実生活上問題が発生しても使用をやめられない	.353	.620	.245	.131	.183
ネットがないことは考えられない	.005	.559	.083	.292	.104
ネットができなくなるとどこでもいいから一刻も早く使える環境に行きたい	.393	.504	.294	.201	.063
第3因子：ネットの実生活への影響					
する時間を短くしようと試してみても失敗したことがある	.129	.196	.657	.108	-.115
計画していたことをやらなかったことがある	.171	.178	.563	.071	.245
ネットを深夜までしてしまい、睡眠不足になった	.162	.199	.532	.153	.246
ネットに熱中し成績が落ちた	.453	.201	.500	.084	.120
常に使用時間を減らすべきだと考えている	.026	-.01	.472	-.008	-.080
ネット使用で生活が不規則になった	.113	.244	.454	.200	.236
ネットし過ぎで視力など問題が出た	.203	.202	.332	.070	.175
ネットすると気分がよくなり興味津津になる	.070	.013	.307	.120	.095
第4因子：ネット利用によるストレス解消					
ネットができないと生活は退屈で面白くない	.131	.504	-.038	.662	.175
ネットすると楽しい	-.122	.235	.174	.589	.255
ネットすると嬉しい	.108	.147	.164	.589	.102
ネットがないと人生そのものが面白みがなくなる	.235	.334	-.051	.565	-.050
ネットをしている間はとても自由だと思う	.149	.140	.158	.545	.141
ネットをするとストレスが全部解消されたように思う	.441	.114	.188	.541	-.105
ネットは退屈さを解消してくれる	-.053	.128	.226	.384	.303
第5因子：交流手段					
ネットを通してコミュニケーションができる	.024	.116	.091	.061	.816
ネットは交流の手段である	-.007	.195	.130	.140	.658
オンラインで友達を作ったことがある	.310	-.035	-.003	.193	.444
寄与率 (%)	30.736	40.098	44.238	47.930	50.674

いとして削除された7項目を本研究でも削除し、再度分析を行い、全ての項目が.30以上の負荷量を示したところで因子を確定した。なお、負荷量が.350に満たない項目は除外することとした。各因子内の項目について内的整合性を確認するために信頼性係数(クロン

バックの α 係数)を算出すると、各因子内の項目について「ネットへの囚われ」 $\alpha = .711$ 「ネット欲求」 $\alpha = .673$ 「ネットの実生活への影響」 $\alpha = .763$ 「ネット利用によるストレス解消」 $\alpha = .709$ 「交流手段」 $\alpha = .783$ が認められた。これらの結果から、 α 係数はいずれも

表5 インターネット依存傾向得点とインターネット依存傾向の下位尺度との相関

		ネットへの 囚われ	ネット欲求	ネット実生活 への影響	ネット利用による ストレス解消手段	交流手段
インターネット 依存傾向得点	Pearsonの相関係数 有意確率(両側)	.943** .000	.742** .000	.645** .000	.560** .000	.325** .000

* $p < .05$ ** $p < .01$

表6 利用時間とインターネット依存傾向得点の検定における平均と標準偏差

	インターネット 利用時間	M	SD	t値
インターネット依存傾向得点	低群	90.663	30.153	-3.297*
	高群	109.889	37.398	-3.037

($p < .05$)

高く、各因子内の項目の一貫性も確認された(表4)。第1因子に高い負荷を示した項目は「ネットが友達より重要な存在である」「ネットをやっていないときもやっているような幻覚を覚えたことがある」「現実の人よりネットで知り合った人が、私によくしてくれる」であった。このことから、現実よりもネットをすることにのめり込みネットに縛られていることを表す因子と解釈し、〈ネットへの囚われ〉の因子と命名した。第2因子に高い負荷を示した項目は「ネットに接続できないと欲求不満になる」「二度とできないと思うととても耐えられない」「ある程度のネットの接続時間がないと満足できない」であった。このことから、常にネットを利用したいという欲求があることを表す因子と解釈し、〈ネット欲求〉の因子と命名した。第3因子に高い負荷を示した項目は「する時間を短くしようと試してみても失敗したことがある」「ネットを深夜までしてしまい、睡眠不足になった」「ネットに熱中し成績が落ちた」であった。このことから、ネット利用が日常生活に支障をきたすようなことを表す因子と解釈し、〈ネットの実生活への影響〉の因子と命名した。第4因子に高い負荷を示した項目は「ネットすると楽しい」「ネットをしている間はとても自由だと思う」「ネットをするとストレスが全部解消されたように思う」であった。このことから、ネットを利用することで快を得、現実でのストレスをネット

上で解消しているようなことを表す因子と解釈し、〈ネット利用によるストレス解消〉の因子と命名した。第5因子に高い負荷を示した項目は「ネットを通してコミュニケーションができる」「ネットは交流の手段である」「オンラインで友達を作ったことがある」であった。このことから、インターネットをコミュニケーションの媒体として用いていることを表す因子と解釈し、〈交流手段〉の因子と命名した。

また、インターネット依存傾向得点とインターネット依存傾向の下位尺度との関連性を検討するためにPearsonの積率相関係数を算出した(表5)。その結果、ネット依存の得点と下位尺度との間に中程度～高い相関が見られた。よって、インターネット依存傾向得点とネット依存の下位尺度はそれぞれ独立するのではなく、強い関連をもつと考えられる。

3. インターネット利用時間についての検討

1日にインターネットを利用する平均時間を尋ねたところ、約半数の人が2～4時間利用していることがわかった。「平成28年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」(総務省, 2017)より、インターネットの平均利用時間が平日99.8分、休日120.7分であることから、「0～2時間」「2～4時間」利用する人をネット利用時間の低群、「4～6時間」「6～8時間」「8時間～」利用する人を高群とする。

表7 インターネット利用時間とネット利用による親子関係の変化の検定における平均と標準偏差

	インターネット 利用時間	M	SD	t値
親との対面交流減少	低群	3.147	1.131	-1.576
	高群	3.471	1.157	
ネットを通した親との交流増加	低群	2.785	1.139	-2.179*
	高群	3.237	1.195	
親との連絡のとりやすさ	低群	4.923	1.179	-.841
	高群	5.067	.830	
親からの干渉	低群	2.945	1.428	-.699
	高群	3.133	1.531	

(p<.05)

表8 ネット利用による親子関係の変化と現在の親子関係との相関

		子が困った時に			
		親が子を支配する	支援する	親が子を頼る	親が子に無関心
親との対面交流減少	Pearson の相関係数	.278*	-.185	.113	.299*
	有意確率 (両側)	.000	.022	.159	.000
ネットを通した親との交流増加	Pearson の相関係数	.080	.258*	.241*	.224*
	有意確率 (両側)	.316	.001	.002	.005
親との連絡のとりやすさ	Pearson の相関係数	.025	.433**	.194*	.026
	有意確率 (両側)	.751	.000	.015	.746
親からの干渉	Pearson の相関係数	.520**	.046	.189	.070
	有意確率 (両側)	.000	.567	.018	.385

*p<.05 **p<.01

1) インターネット依存傾向との関係

ネットの平均利用時間とネット依存傾向との関係性を見るためにt検定を行った。ネット依存傾向に関しては、下位尺度は用いずインターネット依存傾向得点を用いた。その結果ネットの平均利用時間の低群と高群との間に有意差が見られた(表6)。このことから、ネット利用時間が長いほどネット依存に陥りやすい傾向にあることがわかった。

2) ネット利用による親子関係の変化との関係

ネット利用時間と親子関係との関係性を見るためにt検定を行った。親子関係尺度とネット利用による親子関係の変化尺度については、尺度得点の合計を算出して分析の際に用いた。t検定を行った結果、親子関係尺度はどの尺度間とも有意差が認められなかった。ネット利用による親子関係の変化尺度については、ネット利用時間と「ネットを通した親との交流増加」との間に有意差が見られた(表7)。このことから、ネットの利用時間によって現在の親子関係に違いは見られないが、利用時間が長いほどネットを通した親

との交流が増加するということが示された。

4. ネット利用による親子関係の変化尺度と現在の親子関係尺度との相関

まず、ネット利用による親子関係の変化と現在の親子関係との関連を見るために、Pearsonの積率相関係数を算出した(表8)。現在の親子関係の尺度に注目すると、「親が子を支配する」因子では「親との対面交流減少」「親からの干渉」と、「子が困った時に支援する」因子は「ネットを通した親との交流増加」「親との連絡のとりやすさ」、「親が子を頼る」因子は「親との対面交流減少」「親との連絡のとりやすさ」とそれぞれ低～中程度の正の相関を示した。「親が子に無関心」は「親との対面交流減少」「ネットを通した親との交流増加」と弱い正の相関を示した。

5. インターネット依存傾向とネット利用による親子関係の変化との関連

ネット依存傾向の下位尺度とネット利用による親子関係の変化との関連を見るために

表9 インターネット依存傾向とネット利用による親子関係の変化尺度との相関

		ネットへの 囚われ	ネット欲求	ネットの実生活 への影響	ネット利用による ストレス解消手段	交流手段
親との対面交流減少	Pearson の相関係数	.500**	.356**	.428**	.268*	.207*
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.001	.010
ネットを通じた 親との交流増加	Pearson の相関係数	.438**	.248*	.180*	.226*	.275*
	有意確率 (両側)	.000	.002	.025	.004	.001
親からの干渉	Pearson の相関係数	.395**	.220*	.351**	.050	.182
	有意確率 (両側)	.000	.006	.000	.532	.024
親との連絡のとり やすさ	Pearson の相関係数	.077	.197	.140	.272*	.373**
	有意確率 (両側)	.347	.013	.081	.001	.000

*p<.05 **p<.01

表10 インターネット依存傾向と親子関係尺度との相関

		ネットへの 囚われ	ネット欲求	ネット実生活 への影響	ネット利用による ストレス解消手段	交流手段
親が子を支配する	Pearson の相関係数	.294*	.064	.109	.015	.066
	有意確率 (両側)	.000	.424	.176	.853	.413
子が困った時に 支援する	Pearson の相関係数	-.011	.014	.050	.109	0.053
	有意確率 (両側)	.892	.866	.539	.176	0.523
親が子を頼る	Pearson の相関係数	.186*	.062	.063	.093	.205*
	有意確率 (両側)	.022	.441	.436	.247	.011
親が子に無関心	Pearson の相関係数	.479**	.326**	.136	.193*	.077
	有意確率 (両側)	.000	.000	.092	.016	.341

*p<.05 **p<.01

Pearsonの積率相関係数を算出した(表9)。その結果、「親との連絡のとりやすさ」と「ネットへの囚われ」「ネット欲求」「ネットの実生活への影響」、「親からの干渉」と「ネット利用によるストレス解消手段」「交流手段」以外の全ての下位尺度間において低～中程度の正の相関が見られた。

6. インターネット依存傾向と現在の親子関係との関連

次に、ネット依存傾向の下位尺度と現在の親子関係との関連を見るためにPearsonの積率相関係数を算出した(表10)。インターネット依存傾向に注目すると、「ネットへの囚われ」因子は「子が困ったときに支援する」以外の親子関係の因子と中程度の正の相関が見られた。「ネット欲求」は「親が子に無関心」、「交流手段」は「親が子を頼る」因子にのみ弱い正の相関を示し、「ネットの実生活への影響」と「ネット利用によるストレス解消手段」については、どの因子とも相関が見られなかった。

考察

1. ネット利用による親子関係の変化尺度の構造

本研究では尺度作成を通してネット利用による親子関係の変化に関する4つの下位因子が得られた。予備調査の段階では、「ネットを通じた親との交流増加」「親との連絡のとりやすさ」という2つの因子は、親子関係の変化として『ポジティブな変化』が生じたものであると考えていた。また、「親との対面交流減少」「親からの干渉」の2つの因子は、親子関係の変化として『ネガティブな変化』が生じたものと考えていた。しかし、結果を見ると得られた4つの因子は必ずしも『ポジティブな変化』と『ネガティブな変化』に二分されるとは限らないということが示唆された。よって、仮説①は支持されなかった。ネット利用によって必ずしも親子関係が悪化するとは限らず、利用の仕方によっては親子関係が良好になる場合も考えられる。

ネット利用による親子関係の変化尺度を作

成したことにより、現在の親子関係ではなく、親子関係の変化について測定することができる可能性が示唆された。先行研究では親子関係の変化に関する尺度作成は行われていなかったため、今後の有用性が期待される。しかし、本尺度は一時点において親子関係の変化について問い作成した尺度であるため、ネット利用開始前と利用後の二時点における親子関係の変化について測定はできておらず、厳密に親子関係の変化について測ることができているとは言えない。また、今回の研究では一貫性は示されたものの、尺度に不安定な部分も見られた。今後、本尺度を用いた研究を重ね、さらなる検討が必要であろう。

2. 日本版インターネット依存傾向測定尺度の構造

本研究で使用したインターネット依存傾向測定尺度について、鄭（2007）は尺度作成の際に因子解釈可能な項目を残し、共通性が低い項目や項目として不適切なものを削除した上で49項目7因子を抽出している。また、松原（2015）では再度因子分析をして日本版インターネット依存傾向測定尺度の再検討を行い、49項目5因子を抽出している。本研究では、49項目のうち36項目が第1因子にまとまった。さらに、36項目の各尺度得点を合計しインターネット依存傾向得点とした。本研究で作成したインターネット依存傾向得点は、鄭（2007）によるインターネット依存傾向尺度における因子間相関の不安定な部分を排除し1因子構造として扱っている。そのため、日本でネット依存傾向を診断する新たな基準の一つとしても活用できるのではないかと示唆される。

また、ネット依存傾向の下位尺度と他の尺度との関連を検討するため、松原（2015）を参考にして因子数を5因子に固定した上で再度因子分析を行った結果、42項目5因子が抽出された。この5因子構造は松原（2015）に

よる分析結果に類似するものであり、抽出した42項目と各5因子において高い信頼性が得られた。しかし、各因子に示す因子負荷量が松原（2015）の結果と一部異なっていた。本研究では松原（2015）と同様に大学生を対象にしたが、国公立大学と私立大学という違いや年齢の違いがあったため異なる結果が得られたのかもしれない。また、本研究の対象者は小学生あるいは中学生になってからインターネットに触れている人が多いが、近年は生まれた時からインターネットに触れている人がほとんどであることが考えられるため、対象者によっては異なる結果が得られるかもしれない。以上より、今後もデータの蓄積を行っていくことでさらなる有用性を発揮できるものであると考えられる。

3. ネット利用による親子関係の変化についての検討

まず、尺度作成により、ネット利用による親子関係の変化は「ネットを通した親との交流増加」「親との連絡のとりやすさ」「親との対面交流減少」「親からの干渉」の4つの因子から構成されていることが示された。

ネットの平均利用時間との関係性を見ると、ネットを利用したことによる親子関係の変化と有意な差が見られた。このことから、利用時間が長いほどネットを通した親との交流が増加するということが示された。しかし、ネット利用時間が長いためにネット依存に陥り、親子関係に変化が生じるのかどうかに関しては今後も検討の必要がある。

現在の親子関係との関係性については、現在の親子関係尺度に注目すると、それぞれの親子関係とネット利用による交流の変化に明確な違いが見られた。例えば、「親が子を支配する」という親子関係では親との対面交流時間が減少するが、ネット利用によって親からの干渉が強まる。「子が困った時に支援する」親子関係では、むしろ親との対面交流は

減少せず、ネットを通じた交流が増加する。「親が子を頼る」親子関係ではネットを通じた親との交流は盛んになるが、対面交流時間とは関連を示さない。「親が子に無関心である」親子関係では、対面交流が減るのに対して、ネット利用による交流が増加するのである。ネットを利用したことで生じる親子関係の変化に違いが見られたことにより、ネットの利用方法が現在の親子関係を良い状態に保つ、あるいは改善することに影響しているのではないかと示唆される。例えば、「親が子を支配する」親子関係である場合、親からネット利用について干渉が強まることや、子どもが親との対面交流を避けるようになってしまうことが考えられる。そこで、親子が共にネットを利用する環境を作ることによって親子関係が改善していくのではないかと考える。しかし、本研究の結果からは両者の関連のみが示されているため、ネット利用による親子関係の変化が現在の親子関係の状態に影響をもたらしているのかどうかは推測の域に留まる。以上のことから、仮説③は部分的に支持された。

4. ネット依存傾向と親子関係との関連

ネット依存傾向の下位尺度と親子関係との関係性に注目すると、「親が子に無関心」である親子関係において「ネットへの囚われ」「ネット欲求」と正の相関が見られた。よって、親が子どもを支配するような親子関係ではなく、むしろ子どもに関わろうとしない親子関係であるとネット依存に陥る傾向があることが示唆された。以上のことから、仮説②の一部が支持された。また、主成分因子分析の結果において上記2つの因子は全て第1因子に含まれていた。これらのことから、親が子どもに無関心であると、子どもがネットにのめり込み、ネット依存に陥る恐れが考えられる。近年は、SNS機能の発達によって子どもが早期から気軽にネットを利用できるようになっ

ている。そのため、子どもは親に構ってもらえないことでネットを利用することが増え、さらにはネットにのめりこんでいく傾向が見られると示唆される。そのような子どもに対して親が無関心になってしまうと、親が無関心である状態とネット依存傾向とが繰り返されるスパイラル状態になってしまい、ネット利用によって親子関係がネガティブな方向に変化していく恐れが考えられるのである。

総合考察

本研究では、ネット利用による親子関係の変化尺度という独自の尺度を作成することを試みた。作成した尺度を用いることで、現在の親子関係ではなく、ネット利用によって変化する親子関係について検討することができた。また、「ネットを通じた親との交流増加」「親との連絡のとりやすさ」という下位因子が得られたことから、ネット利用によって必ずしも親子関係が悪化するとは限らず、良好になる場合も考えられた。しかし、近年はインターネットの存在が当たり前になり、日本の社会的風潮やインターネット情勢が大きく変化していることが考えられる。それと同時に、ネットの利用方法やネット依存傾向も変化しているのではないかと推測される。ネット利用による親子関係の変化についての研究は、今のところほとんど行われていないため、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

また、本研究ではネット依存傾向、現在の親子関係、ネット利用による親子関係の変化との間に因果関係を見出すことはできなかった。しかし、ネット依存傾向と親子関係の間には関連が認められ、ネット依存傾向の一部の下位尺度はネット利用による親子関係の変化とも相関が見られていた。先行研究と同様に親子関係が良好であり、支配的な状態がネット依存に陥りやすい傾向にあるのではな

く、むしろ親が子どもに関わりをもたない方がネット依存傾向に陥りやすいということが示唆された。これらのことから、親が子に関心を持つことや親子でネットを共有しながら利用することが、親子関係を良好・維持し、ネット依存に陥らないことに繋がるのではないかと考える。今後は、ネットの利用方法に重点をおいた研究を行うことも必要なのではないかと示唆された。

今後の課題としては、まずネット利用による親子関係の変化尺度の検討である。今回は厳密に変化を測定する尺度を作成することはできなかったため、研究を重ねて尺度の見直しを行うことが必要であると考え。また、因果関係の特定ができなかったことも今後の課題として挙げられる。本研究では、ネット依存と親子関係との関連に影響を及ぼす要因としてネットの利用方法を挙げたが、利用方法が単一に影響しているとは考えにくい。そのため、ネットの利用方法以外にも何らかの原因が影響を及ぼしているとして、今後はそれらにも注目していかなければならないと考える。

付記

本論文は、2017年度北海道教育大学教育臨床専攻・発達教育心理分野において卒業論文として提出したものに加筆・修正を加えたものである。本論文の作成にあたり、ご指導いただきました北星学園大学牧田浩一先生、北海道教育大学平野直己先生、調査にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 安藤明人 (1999). インターネット依存とインターネット・ギャンブル 武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集, 405-416
- 青山郁子・高橋舞 (2015). 大学生におけるインターネット依存傾向, 攻撃性, 仮想的有能感の関連 日本教育工学論文誌, *39*, 113-116
- 藤川大祐 (2008). ケータイ世界の子どもたち 講談社, 現代新書, 東京
- 服部恒明・小向史子・佐藤裕子・藤田真澄 (2003). 大学生の携帯電話の利用とストレスに関する調査 茨城大学教育実践研究, *22*, 139-149
- 堀川裕介・橋元良明・千葉直子・関良明・原田悠輔 (2015). スマートフォンによる青少年のインターネット依存および親子関係と依存の関連 社会情報学, *3* (2), 89-94
- 片山友子・水野(松本)由子 (2016). 大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性 総合健診, *43* (6), 657-664
- 小坂守孝 (2007). 大学生のインターネット・携帯電話利用に関するストレスと、ハーディネス・ストレス反応との関係 北方圏生活福祉研究所年報, *13*, 33-42
- 松原彩乃 (2015). インターネット依存と親子関係との関連についての研究 追手門学院大学心理学論集, *23*, 77-84
- 長田洋和・上野里絵 (2005). ネット中毒をめぐって—Internet Addiction Test (IAT) 日本語版について— アディクションと家族, *2* (22), 141-147
- 大野志郎 (2016). 高校生のネット逃避—抑うつから実害への構造分析 情報通信学会誌, *34* (1), 1-10
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, *46*, 333-342
- 佐藤寛・松原耕平・石川信一・他 (2014). 発達の観点に基づくインターネット依存の疫学調査 公益財団法人明治安田こころの健康財団研究助成論文集, *50*, 68
- 総務省 (2017). 平成28年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 調査報告書
- 総務省 (2017). 平成28年度通信利用動向調査報告書
- 鄭艶花 (2007). 日本の大学生の“インターネット依存傾向測定尺度”作成の試み 心理臨床学研究, *25* (1), 102-107
- 鄭艶花 (2008). インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究 心理臨床学研究, *26* (1), 72-83
- 鄭艶花 (2013). 若者のインターネット依存傾向形成要因と特徴に関する心理学的研究—グラウンデッド・セオリー法を用いて— 九州共立大学総合研究所紀要, *6*, 19-26

- 田中博之 (2009). ケータイ社会と子どもの未来: ネット安全教育の理論と実践 メディアアイランド, 大阪, 1章, 1節-2節
- 鶴田利郎・田中博之 (2012). ネット安全教育における参加型アクティビティの効果に関する研究: 私立高等学校での授業実践による生徒の評価を通して 早稲田大学大学院教職研究科紀要, 4, 59-74
- 鶴田利郎・山本裕子・野嶋栄一郎 (2014). 高校生向けインターネット依存傾向尺度の開発 日本教育工学会論文誌, 37 (4), 491-504
- 山岸明子 (2000). 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, 12, 31-46
- Young, K. S. (1998). internet addiction: the emergence of a new clinical disorder. *Cyber Psychology and Behavior*, 1 (3), 237-244
- 和田正人 (2002). 大学生のインターネット中毒とインターネット不安の関連についての実証的研究 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 199-207